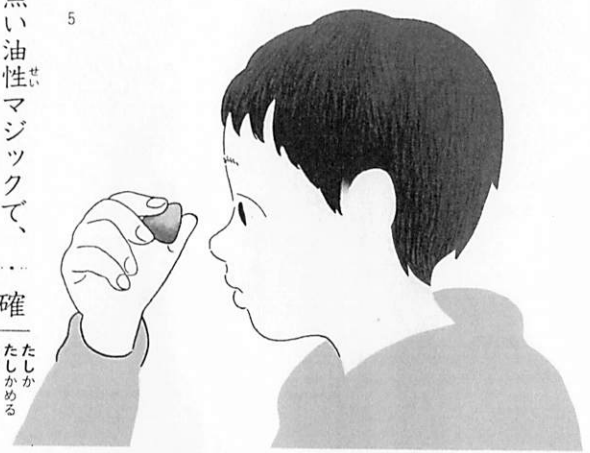
おにぎり石の伝説

戸森（ともり） しるこ 文
西村（にしむら） ツチカ 絵



① 始まりは、こんな一言だった。

「この石、なんだかおにぎりみたい。」

② だれが最初にそう言ったのかはわすれてしまったけれど、その一言がきっかけで、空前のおにぎり石ブームは始まった。

③ それは、すべすべした手ざわりの、小さな三角形の石で、確かにぼくの目にも、指先サイズの小さなおにぎりのように見えた。黒い油性（ゆせい）マジックで、のりをかき足してみたくなる。

④ おにぎり石の出現は、ある日とつぜんだった。学校のうら庭に、じゃりがしかれている場所があり、そこにあるふつうの石たちにまぎれて、発見されるようになったのだ。簡単（かんたん）に見つかるわけではなくて、集中してさがして、せいぜい一日一個とか、とてもラッキーな感じのする、いいぐあいの確りつだった。

⑤ 初めは、ぼくのクラス、五年二組の女子の間で、おにぎり石が人気になった。四つ葉のクローバーを見つけるような感覚だ。それでぼくたちも、そのうち何となくつられ始めた。

「すべすべしていて、ふつうの石とはちがう気がする。」

「こんな石が自然にできるなんて、不思議だよね。」

「見つけた人は、幸せになれるらしいよ。」

⑥ すると、おにぎり石にまつわる、みょうなうわさ話が聞こえてくるようになった。その昔、あるたんけん家が、なぞの「おにぎり島（じま）」から持ち帰った石なのだとか、この学校ができる前、ここには「おにぎりランド」とよばれるテーマパークがあったのだとか、きょうふの「おにぎり大魔王（まおう）」ののろいの石なのだとか……。数々の「おにぎり石伝説」に、ぼくらはうっかりむねをおどらせた。

⑦ 休み時間になると、みんなでおにぎり石さがしだ。放課後には、クラス内で複数の

確（たしか・たしかめる・カク）　現（ゲン・あらわれる・あらわす）　個（コ）　四（よっ）　複（フク）

発くつチームが組まれた。気がつくと、担任の先生のつくえの上にまで、おにぎり石がかざられている。大人にまでえいきょうをあたえるおにぎり石はすごい。ぼくたちのおにぎり石熱は、ますますヒートアップしていく。

「聞いた？　青木が見つけたんだって」

「いいよなあ。ぼくも同じ場所をさがしてたんだけどなあ」

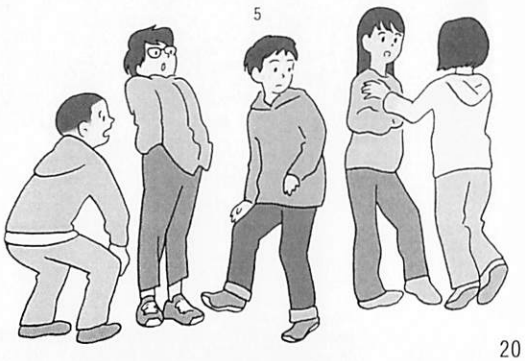
「見つけられない最後の一人にはなりたくないな」

「それはみじめすぎるよな」

⑧ おにぎり石そのもののみりょく以上に、おにぎり石を見つけられたとき、心からうらやましがられる感じが、ぼくたちの気持ちを高まらせていた。

⑨ 見つけられたらクラスの人気者。そして、人生はバラ色だ。一刻も早くおにぎり石を見つけて、このゲームからぬけ出さなくちゃならない。そんなふうに、だんだんあせる気持ちが強くなっていく。

⑩ 必死に石をさがしながらも、ぼくは少しだけもやもやしていた。いつの間にそんなバトルになってしまったんだろう。初めはこんなはずじゃなかったのに、どうもおかしい。先生のつくえの上にあるおにぎり石を、ぼくは思わずじっとにらんだ。



⑪ そんなある日、じゅくで最近仲良くなった一成から、

「真のクラス、なんだかちょっと変じゃない？　うら庭に何かあるの？」

と聞かれた。一成はとなりのクラス、五年一組だ。ぼくはぎょっとしてしまった。

⑫ なぜかというと、おにぎり石さがしは、ぼくたちのクラスげん定のブームでなくてはいけないからだ。もしもほかのクラスの連中までさがし始めてしまったら、見つけられる可能性は、うんと低くなってしまう。だから、ほかのクラスにはひみつという、暗もくのルールがあった。そこでぼくは平静をよそおって、別に何もないと答えた。

「だけど、クラス全員で、何かにとりつかれている感じがするぞ」

⑬ 実は今日の休み時間に、ぼくは初めておにぎり石を手に入れたところだった。すごくうれしかったし、かなりほっとした。それで、正直なところ、ぼくはおにぎり石を自まんしたい気持ちでいっぱいだった。

⑭ 一成は口が固そうだし、クールな男だから、おにぎり石ブームには、きょう味をし

めさないだろう。それに、ほかのクラスのやつがおにぎり石を見たときに、いったいどういう反のうをするか、ちょっと気になった。この石は本当に、そんなにかちのある物なのだろうか。それで、ぼくはおにぎり石をポケットから出して、一成に見せることにした。

⑮「実は、みんなでこれをさがしているんだ。貴重なんだぞ。伝説のおにぎり石だ」

石にまつわる伝説を三つほど語り終えたところで、一成がとつぜん、「ぷっ」とふき出したから、ぼくはむっとした。

「何で笑うんだよ？」

「ごめん。とりあえず、明日の放課後、うちに来てもらってもいいかな。話はそれからだ」

⑯意味が分からない。

⑰次の日、ぼくは初めて一成の家に行った。

「屋根が三角だ……」

10　5

句 ク　絶 ゼツ たえる たやす たつ　名 ミョウ

⑱まるでおにぎり石のような、三角屋しき。そういえば、一成の名字は「三角」じゃないか。だから何だと言われてもこまるけど。

「いらっしゃい。庭へどうぞ」

⑲一成はそう言って、ぼくを庭に案内してくれた。

⑳その光景を見たとき、ぼくがどう思ったか、言葉ではとても表現できそうにない。

「うわあ、何だこれ！」

㉑ぼくがそこで目にしたものは、何千、何万の、おにぎり石の大群だった。おにぎり、おにぎり、おにぎり、石だらけ。庭におにぎり石がしきつめられている。

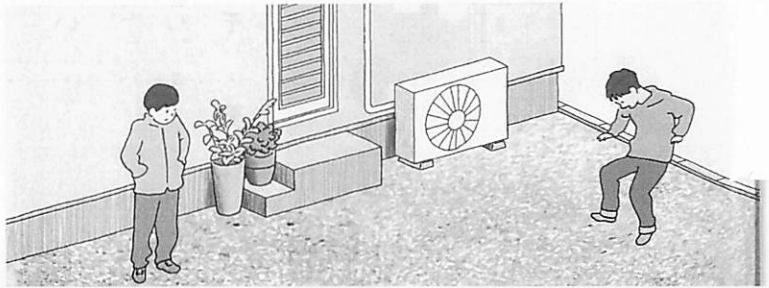
「すげえ！　一成、さてはおまえがおにぎり大魔王だったんだな？」

㉒一成はかたをすくめて言った。

「これは人工的に作られた石だよ。自然にできた物ではないし、もちろん、大魔王ののろいのわけもないし」

㉓ぼくは絶句だ。まるで時間が止まってしまったみたいに、ぽかっと口を開け

10　5



たまま、一成の顔を見ていた。

「でも、じゃあ、学校のおにぎり石は……？」

「知らないけど、例えばカラスかなんかが、ここから持っていくんじゃないか？　いたずらか、ちょっとした思いつきでさ。どっちにしても、深い意味なんかないよ。」

㉔ぼくの頭の中で、まぬけな声のカラスが鳴いた。

㉕あまりのしょうげきで、しばらくの間立ちつくしていると、そんなぼくの顔をのぞきこみ、一成は心配そうに言った。

「言わないほうがよかった？　二組の夢がこわれたかなあ。」

㉖ぼくはあわてて首を横にふった。確かに夢から覚めた気分だったけど、そのおかげで、ぼくはあることを思いついたのだった。

「ちょっとお願いがあるんだけど。」

㉗次の日の放課後、五年二組のみんなは、おにぎり石さがしを中だんし、一成の家に集まった。おにぎり石だらけの庭を見ると、みんな、あっけに

夢

とられてとまどいながら、それでもやっぱりよろこんでいた。

「おにぎり石パラダイスだ！」

「最高すぎる！」

「一つもらってもいい？」

「じゃあぼくは二つ。」

「ぼくは三つ！」

㉘だけどぼくは、タイミングを見計らって、わざと水を差すようなことを言った。

「でもさ、こんなにたくさんあると思うと、なんだかかちが下がるような気がしないか？」

㉙ちょっとどきどきした。空気を読めないやつだって、言われてしまうかもしれない。だから、そう言われる前に、ぼくは一成に目くばせした。一成はうなずいて、

「おいおい、勝手にやってきて、失礼なやつだなあ。」

と、計画どおりに、おどけてせりふを言った。

「確かに、こんな石のどこがいいんだろうって、ぼくは思っちゃうけどね。」

㉚一成の冷静な一言を聞いて、みんなはそれぞれ顔を見合わせた。

㉛すると、様子をうかがうような、いっしゅんの間の後で、だれかが言ったんだ。

「真の気持ち、分かるよ。めったに見つけられないってところが、よかったんだよな」。

㉜そうしたら不思議なことに、みんなも口々に同じことを言い始めた。いっせいに色が変わるみたいに、気持ちが伝染していった。すごいいきおいだった。最終的に、

「ああ、がっかりだよ」。

なんて言い合って、かたを落としながら、みんなでえがおになったんだ。おにぎり石の庭で、ぼくたちはそろってくすくす笑っていた。こんなのって久しぶりだった。

「一つずつなら、持って帰ってもいいよ」。

㉝一成は言ったけど、おどろいたことに、持ち帰ろうとするやつは、もう一人もいなかった。むしろ、今までに見つけたおにぎり石を、一成の庭に「返きゃく」するやつが出てきた。

㉞おにぎり石のせいで、クラス内でびみょうな上下関係ができ始めていることに、きっとみんなも気がついていたんだと思う。このゲームを終わらせるには、何か強力なパワーかアイテムが必要だったんだ。

㉟新たな気持ちになって見てみると、おにぎり石は、やっぱりとてもきれいで、すごくユニークな石だった。

㊱みんなが帰った後、ぼくは一成にお礼を言った。

「ありがとう。確かにぼくたち、何かにとりつかれていたのかもしれない」。

㊲これで、ぼくたちのおにぎり石伝説は終了、一件落着ってわけだ。

㊳えがおで片手をあげた一成の手をパンとたたいて、ぼくはそう思った。

戸森しるこ（ともり しるこ）
一九八四年生まれ。作家。「ゆかいな床井くん」「十一月のマーブル」などの作品がある。

久 ひさしい キュウ